

自分らしさを求めて

中央市立田富中学校三年 森本 紗英

「いじめなどあるはずがない。」

新学期、校長先生がいじめの話題を出したとき、私はそう思いました。私が思ういじめとは一方的に暴力を振るう、仲間外れにする、陰口を言うなど、相手を傷つけようとする行為のことでした。しかし、相手を傷つけようと思っていなくても知らぬ間に傷つけてしまっていることがあります。

これは私が実際に体験した出来事です。私のクラスメートにAさんという、足が速くて活発な女の子がいました。ある日、クラスの友人と話しているとAさんの話になりました。「Aさんって太っているくせに足が速いよね。女の子のくせに体型とか気にしないのかな。」初めは何とも思わず、うなずいていました。たしかにAさんは肥満体型で、足が速いということも間違いではありません。しかし、後になって友人のもらした言葉の一部に、私は違和感をおぼえたのです。それは

「太っているくせに」

という言葉です。

「貧乏なくせに」

「外国人のくせに」

など「くせに」という言葉は色々な場面で耳にします。人はなぜ「くせに」という言葉を口にするのでしょうか。それは他人を軽蔑することで自分のプライドや優越感を保っていたいという考えからではないのでしょうか。自分より優れている人がいるのが許せず、自分を高く見せるために「自分より劣る人間」を勝手に作りあげているのでしょうか。しかし、他人を軽蔑するという行為は自分の価値までも落としてしまっているような気がします。先ほどの友人とは「くせに」という言葉について話をしました。友人に全く悪気はなかったそうです。「足が速い」だけでも考えていることは間違いなく伝わるのだという結論に至りました。

これらの出来事によって人権について少し興味を持った私は、道徳の教科書を開きました。ふとページをめくるとそこには

「ふつうってどういうことだろう」

と書いてありました。今まで、ふつうの基準は自分自身でした。自分のように家があるのがふつうで、元気に暮らしているのがふつうで、学校に行くと友達がいることがふつうだと思っていました。しかし、

「私のふつうとあなたのふつうは違う。それを私達のふつうにしよう。」
教科書にはそう書いてありました。人々が時にぶつかったり、誤解したりするのは、何をするにも考え方や受け止め方が違うからなのだと思います。もしも相手とすれ違って争いごとが起きそうになったら、
「あの人と私は違う。それはふつうのことで、みんな違っていいんだ。」

と自分に言い聞かせてお互いが心地よく、認め合える社会にしたいです。

人権について深く考えたい私にとって、これらだけでは物足りず、母親に話を聞きました。私の家の家族構成は父、母、私、弟です。母は父と結婚し、子供を産んでから名前と呼ばれることが少なくなったそうです。父の友達や仕事仲間からは

「〇〇さんの奥さん」

と呼ばれ、私や弟の友達、さらにその親からは

「〇〇くん、〇〇ちゃんママ」

と呼ばれています。夫婦同士でも互いに名前呼び合う回数は減ったと言います。また、新姓になったばかりの頃は新姓に慣れず、病院で名前を呼ばれるときなどに少し戸惑ったそうです。女の方は結婚すると旧姓で呼ばれなくなり、家族ができれば名前までも呼ばれなくなります。まるで自分が自分ではないようだと言いました。これも立派な男女差別になるのではないかと考えます。

私のクラスでも勉強が得意な人、運動神経が良い人、人前で発言することが苦手な人、一人でいることが好きな人など様々です。違う環境で育った者同士が集まっているのだからそれは当たり前のことなのです。大切なのは思いこみをせず、相手のことをよく知ろうとすること。そして違いは違いとして認め、分かり合う努力をすることです。誰もが自分らしさを大切に生きていける社会になることを願っています。